

A-34) germinoma 治療における放射線照射前化学療法

青山まゆみ・池田 潤
 加藤 功・多田 光宏 (北海道大学
 澤村 豊・阿部 弘 (脳神経外科)
 白土 博樹 (同
 放射線科)

【目的】germinoma は放射線に極めて感受性が高く、従来より大量放射線療法が施行されてきた。しかし近年、生存例における放射線障害が問題となっている。今回我々は放射線照射に先行して化学療法を行い、照射線量を減じ、良好な成績を得たので報告する。

【方法】当科で最近経験した15症例を血清学的所見と腫瘍の進展度により2群にわけ、放射線局所照射 (24 Gy) 前に化学療法を行った。すなわち、組織診断の後、単発性の pure germinoma の6症例に対しては cisplatin と etoposide を用いた化学療法 (EP 化学療法) を3ないし4コース施行し、HCG-β 陽性あるいは多発性、髄液播腫した9症例では EP 化学療法に ifosphamide を加え (ICE 化学療法) 3~6コース施行した。髄液播腫症例にのみ全脳全脊髄照射を追加した。【結果】3症例で腫瘍は全摘出されていた。部分摘出または生検した残りの12症例では化学療法に反応し、3コース以内に全例で完全寛解を得た。平均追跡期間31カ月で14例 (93%) が再発なく生存中である。HCG-β 陽性の1例で手術後39か月目に再発したが、ICE 化学療法を追加し再び完全寛解を得ている。15症例の Karnofsky performance status は70~100%と良好であった。副作用はすべて可逆的なものであり、神経、内分泌学的障害は残さなかった。【結語】照射前化学療法として、germinoma の治療に EP/ICE 化学療法は有効である。

A-35) 悪性グリオーマに対する拡大全摘術の有用性

別府 高明・和田 司
 荒井 啓史・吉田 雄樹 (岩手医科大学)
 鈴木 倫保・小川 彰 (脳神経外科)

〈目的〉悪性グリオーマに対する全摘術症例を、MRI で Gd-enhance される腫瘍域のみを摘出する狭義の全摘術と、その周囲を可能な限り摘出する拡大全摘術 (lobectomy を含む) にわけ比較し、拡大全摘術の有用性を検討した。

〈対象・方法〉対象は1989年から1996年に Glioblastoma (GB) または anaplastic astrocytoma (AA) で全

摘術を受けた20症例で、これらを拡大全摘群 (ETR 群) 10例、狭義の全摘群 (TR 群) 10例の2群に分け、2群間で種々の予後因子、増殖能、生存率を比較した。

〈結果〉2群間で有意差を示した予後因子は performance status で、有意に ETR 群で高値を示した。その他の予後因子と増殖能に差異はなかった。生存率は GB 症例で2群間に差異はなかったが、AA で良好の傾向が見られた。また ETR 群内で AA は GB に比較し有意に生存率が高かった。

〈結語〉拡大全摘術は glioblastoma に比較し、anaplastic astrocytoma で有効であることが示唆された。

A-36) Extradural Temporopolar Approach による Craniopharyngioma の摘出術

鷲見 佳泰・佐々木雄彦
 伊東 民雄・岡 亨治 (中村記念病院)
 北條 敦史・中川原譲二 (脳神経外科)
 武田利兵衛・中村 博彦 (北海道脳神経)
 末松 克美・中村 順一 (疾患研究所)

今回我々は craniopharyngioma に対して Extradural temporopolar approach を用い良好な結果を得たので報告する。

症例：38歳女性。頭痛と右視力の低下にて受診。右視力低下、左側頭視野障害を認め、右側方に進展する retrochiasmatic type の craniopharyngioma を認めた。右 orbito-zygomatic frontotemporal craniotomy による extradural temporopolar approach で摘出術を行った。側下方からの視野で、視神経と腫瘍の癒着部が確実に視野に得られ、安全に剝離でき、stalk の温存も可能であった。結果：全摘出が得られ、術後視力は改善し、尿崩症は出現しなかった。結論：本 approach は upper clivus から infrachiasma の病変に有用で、retrochiasmatic type の craniopharyngioma に対しても有用と考えられた。

A-37) Malignant pituitary adenoma の1例

斎藤 隆史・大塚 顕
 倉島 昭彦・土屋 俊明 (長野赤十字病院)
 原田 敦子 (脳神経外科)
 渡辺 正秀・羽田 悟 (同 病理)

症例は視力視野障害で発症した39才男性。鞍上進展を示す非機能性下垂体腺腫に対し、開頭腫瘍摘出術を行った。組織診断は Pituitary adenoma であったが、5カ月後に局所再発を認めたため、再度摘出術を行い、50 Gy